

おおぞら

No. 196

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
 総合病院 聖隷三方原病院
 聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
 静岡県浜松市北区三方原町3453
 TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
 編集者 横地健治

2020年3月1日

重症心身障害児者の活動

横地 健治

重症心身障害児者には施設内でどんな生活経験をしてもらうべきなのかは本通信でたびたび取り上げています。この人たちは自分でしたいことを決めて実行することはできません。そのため、職員がその人に最適な生活経験は何かを考えて、その実践を支援しなければなりません。それを私たちは「活動」と呼んでいます。今回は有意な言語理解のない人たちの発達段階に即した活動とは何かについて考えてみます。

有意な言語理解のない人たちと対比するために、まず、乳児がどんな世界にいるのかを考えてみます。生まれて初めて見るものは色や明暗の混ざった線や形が渾然一体となっており、それが何なのかはさっぱりわからないはずです。これに対し、聞こえるものに対しては、胎児期からの経験により一定の聞き分けは可能なはずです。特に母の声は絶対的保護者として聞き分けているでしょう。その生活経験のなかで、見えるもの、聞こえるものが自分にとってどういう意味があるものかを

探ります。手の届くところにあるものには、手で触つてその意味を深めるでしょう。こうして外界(がいかい)の事物をグループ分けし、ラベル付けを行い、記憶していきまます。次にそれと同じようなものを見聞きしたら、そのラベルを呼び出し、そのグループ分けを修正し、より精密なものにしていくでしょう。そうして、そのラベルをその社会の他者と共有できれば、他者の外界理解を取り込むことができます。それが「言語」です。言語を介することになれば、外界理解は言語と不可分のものになります。よって、有意な言語理解のない段階での事物のグループ分けは健常者のものとはまったく違うでしょう。

外界には、直接見聞きできないが、さらに重要なものがあります。それは人の心です。もちろん、他者の心は永遠の謎です。しかし、好意・敵意・容認・拒否・虚偽など最低限の人の心が読めなければ、人と交わることはできません。これは保護的な環境のなかで十分な対人関係の経験から学

ぶしかないものです。そうして、これも言語を介して理解するようになります。よって、有意な言語理解のない段階では、心を言語で表しても伝わりません(実は、健常者でも同じです)。心は感じるしかありません。

それでは、言語を獲得できずに生活経験を積んでいる重症心身障害児者はどのように外界を理解しているのでしょうか。おそらく、グループ分けは少しされるだけで、個々のものを自分の生活と関係づけて理解しているように思えます。例えば、同じものでも置き場所を変えたら、もう違うものになっていそうです。また、人の心は、自分と関係するものを介在させた明解な心的状態に限って、感じているのでしよう。心にもない偽りの言葉はまったく意味をなさないでしょう。

そうしたら、有意な言語理解のない重症心身障害児者にはどんな活動をすべきでしょう。その前に、乳児が外界を理解するとどんなことなのかを振り返ってみます。乳児は、目の前にある混沌とした世界を解明する膨大な作業を自力で行います。これに費やす能動的エネルギー量から、それは「活動」と言える

ものです。なお、こんな高度な作業ができるのは、先祖から引き継いだ遺伝子がその解読マシーンとして働くからです(自力と言うには語弊があります)。この作業はどう呼ぶべきでしょうか。自己の経験から外界の知識を得るので、「学習」と言うことができます。しかし、これには教師がいないので、むしろ「研究」の方が合っています。健常成人が自己の生活を再生産するための糧を得る行為、さらに、社会的存在のとしての本分を果たす行為を「仕事」と呼びます。小児が勉強するのは、こうなるための能力を開発する行為であり、これは「子どもの仕事」とみなすこともできます。ですから、外界理解は、乳児の「仕事」と呼ぶこともできます。外界理解は仮説を作っては壊す作業の繰り返しなので、乳児は成功と挫折を繰り返しています。よって、この作業は単純に楽しいから行うものではありません。外界理解の本能的欲求を満たすためのものでしよう。このことは、重症心身障害児者にもそのまま当てはまるはずです。外界のもの(他者の心を含めて)に関心を向け、それが何か理解しようとして心を巡らす過程は、

解しようとして心を巡らす過程は、

横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の3項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1-C, B2, D2-U, B5-B, C4-D

〈知的発達〉					
E6	E5	E4	E3	E2	E1
D6	D5	D4	D3	D2	D1
C6	C5	C4	C3	C2	C1
B6	B5	B4	B3	B2	B1
A6	A5	A4	A3	A2	A1
戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可

簡単な計算可
簡単な文字・数字の理解可
簡単な色・数の理解可
簡単な言語理解可
言語理解不可

〈特記事項〉
C:有意な眼瞼運動なし
B:盲
D:難聴
U:両上肢機能全廃
TLS:完全閉じ込め状態

(移動機能)

まさしく善き活動です。有意な言語理解のない重症心身障害児者にとって、まずは、「素朴概念」に関するものが最も基本的な活動内容と考えます。素朴概念とは、物は視界から消えても存在し続ける、ひとつの物体が別の物体をすり抜けることはない、物は塊としてまとまっている、離れている物どうしは作用しないが、接触するとお互いに作用を及ぼす、支えがなければ物体は下に落ちるといったことです。これらは、外界のもの自体、ものとももの

関係を理解することです。この時、見えること、聞こえること、それを操作する人の動作は複合的に提示された方がいいでしょう。可能ならば、人が触れた方がいいでしょう。ものの多い感覚情報と、ものと人の関係の情報が合わさるでしょう。こうして、その人の外界の世界が豊かなものになっていけば、善い活動を行っていることとなります。そして、ものと人の心がどう関係するか、ものを介して二人の人の心がどう関係する

ひかりの子の 日常生活 和田 彰

かといったことが次の外界理解の内容です。重症心身障害児者にこれらを知る手がかりを与えることが、私たちの考える生きがい活動です。

Aさん(横地分類B4)は、近くにいる他児が絵本や楽器を持っていくと、声を出して手を伸ばすことがあります。その後、職員に向けて手を伸ばし、同じように声を出します。また、自分で棚まで移動して玩具のキーボードを引き出し、ボタンを指で押していることがあります。電源が点けられると、音色が変わるボタンをよく触っています。出した音色に切り替わらないと、職員に手を伸ばして不満そうな声を出していることがあります。その後、望んでいた音色が出ると、今度は自分で夢中になって鍵盤のボタンを押していました。好みの音色があるようです。Aさんは音色が変わる、色がつく、形が変わる、描いたものが消えるなど、次の展開を期待して操作する遊びに興味があるようです。そこで、自分でおこなった



ことが手応えとして感じられ、それが見えるものがよいと考え、砂鉄で絵を描く幼児向けの知育玩具(以下、お絵かきボード)を使用しました。Aさんは、専用のペンを持つとお絵かきボードにペン先をトントン当てて描いていました。視線は描かれた黒いところを見ています。丸や三角の形の道具も、動かしていません。その後、消すためのレバーをゆっくり横に移動させ、描いたものを消しました。初めは動かしているレバーの動きを見ていて、消えていくところは全く見ることはありませんでした。Aさんはしばらく夢中でお絵かきボードのレバーを触って自分で動かしていました。Aさんがレバーを

端に動かした時に、お絵かきボードの中央にスタンプのようにはやく描きました。何回か描いてはAさんが消すという動きを繰り返していました。ふと視線がボードの中央に向けられ、動かしていた手を一瞬止めていました。中央にまた描くと、再びレバーを横に動かしました。今度はボードの中央に視線は向けられ、確実に消えるところを見ていたようでした。その後は何度も消えるところを自分で動かして見ていました。Bさん(横地分類B1)は、紙やシール、膨らませた風船、保冷剤の押し返るような感触を好みます。粘土は、やさしく握る、小さくちぎるなどして遊びます。他児の遊びにも興味があります。ボールを転がしている動きやボールが転がって物が倒れる動き、お絵かき、シール貼りのような徐々に変わっていくものなどをしていくと、じつとよく見ていることがわかります。Bさんはそれらをあまりやろうとすることはありませんが、徐々に結末に向かっていく過程や違う形に変化していく過程に興味があり、見ているようです。そこで、少し離れた見えるところ(1mくらい)でおこ

ない、自分からやりたくなるようにしました。また、徐々に違う形になる過程が面白いのではないかと考え、広告や新聞紙を使って紙を折る動きを見せました。初めは折っているところをじっと見ていました。何回か折っていると手を伸ばしはじめました。Bさんに近づけると、新聞紙の端を手の平で触っていました。その内に触っていた手の動きが小さくなっていき、その代わりに折られている部分や職員の指の動きをじっと見るようになりしました。角をさらに内側に折り、次に同じ形の角を同じようにゆっくり折っていると、手を伸ばしてききました。Bさんは、指先で押し込むように力を入れて折って



ました。あとの2つの角も一緒に折り、とても集中した表情をしていました。折ったものをBさんが持つと、柔らかな表情になりました。

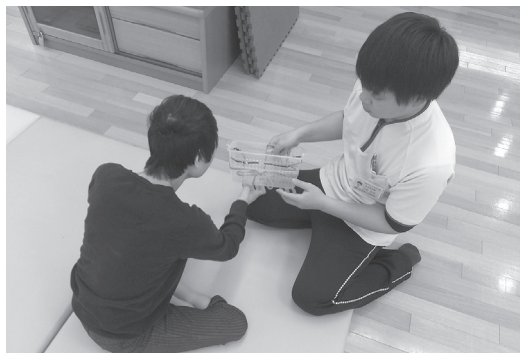
**ほくとの
日常生活
加茂 進**

Cさん(横地分類A4)はリビングで過ごしているときに職員や利用者の声がすると顔を周囲に向けながら聞いています。特に職員の歌いかけをよく聞いていて、リズムの良い歌の時はリズムをとるように体を揺らして聞いていることがあります。またゆったりとした歌いかけではじっと聞いています。Cさんは曲調の違いを感じていますが、そこでリズムやテンポのちがう曲を聞く活動をしました。テンポのよい曲では『ひげじいさん』を歌いかけました。「トントントントン」の歌い出しの弾むようなリズムにCさんは、正座した姿勢からぱつと顔を上げて振り返り、隣にいる職員に顔を向けました。歌の始まりにハツとした表情でしたが「ひげじいさん」のフレーズまで歌うと職員の顔を見て表情が和らぎました。次に続くフレーズで間が空く



とCさんは職員の方に顔を向けました。次に続く歌いかけを待っているようでした。それからまた「トントントントン・・・」と歌いかけが始まると、今度はリズムをとるように顔を左右に振りはじめました。「トントントントンこぶじいさん・・・、トントントントンてんぐさん・・・」と「さん」で区切って繰り返し、そのリズムをつくると間をとった部分で職員を見つめ、続きの歌を待っているようでした。Cさんは歌い出しのタイミングを期待し、集中して聴いていました。歌のテンポのよさと短めのまとまった繰り返し返し、その後の間が良かったようです。

『夕焼け小焼け』を歌いかけました。「ゆーやーけー、こーやーけーでー・・・」と伸びやかに歌いかけをするのでCさんは正座していた姿勢からごろんと職員の側に横になりました。職員がCさんの顔を覗き込むとCさんは職員の顔をじっと見つめて歌を聞いていました。周囲から様々な音や声も聞かれましたが、テンポのよい歌のときはちがった柔らかな表情でじっと歌いかけを聞いていました。



Dさん(横地分類A3)はメロディーブックの音を出すときに、力を加減してスイッチを押したり、職員がギターの音を出すとDさんもギターの弦を指でやさしく弾いて音を出したりします。そこで指

先の力加減で形や動きの変化が感じられる活動を行ないました。カゴに靴紐を通して蝶々結びをつくって見せるとすぐに手を伸ばして靴紐の先端を指先で引っ張り蝶々結びをほどこきました。スルスルつと紐がうまくほどけるとDさんは表情を緩ませ、逆に絡まったときは真剣な表情になつて力を入れて引っ張っていました。結び目を小さくすると始めは輪になっている部分を触っていましたが靴紐の先端を見つけるとそつとつまんでほどこきました。靴紐をリボンに変えると勢いよく引っ張っていました。結び方や紐の素材によって引っ張ったときの感触にちがいがあっても面白みを感じているようでした。



クリスマス礼拝

2019年12月21日(土)に、クリスマス礼拝が行われました。
佐藤チャプレンによる新約聖書の朗読が行われ、入所者・ご家族・職員も一緒にクリスマスをお祝いしました。



日常活動報告会

12月21日(土)、クリスマス礼拝の終了後に日常活動報告会を開催しました。82名のご家族に参加いただきました。

日常活動報告会は、利用者日々の生活の様子について、ご家族に知っていただくことを目的としています。当日は代表職員から利用者の生活環境や活動の意義についてお話しさせていただきました。その後、グループや個別で利用者個々の活動の様子について報告し、実際に活動しているビデオ映像や活動素材をお見せしながら日頃の活動をお伝えしました。

これからも職員一同、利用者の生活の質の向上に取り組んでまいります。



苦情解決委員会

2019年7月～9月公表する苦情はありませんでした。

	11月	12月
ショートステイ 利用者数 (延べ利用日数)	69人 (357日)	70人 (359日)
放課後デイ 利用者数 (延べ利用日数)	46人 (79日)	46人 (103日)
ボランティア 参加人数 (グループ数)	12人 (2グループ)	8人 (1グループ)
実習者数 (グループ数)	2人 (1グループ)	1人 (1グループ)